

第1回養豚問題懇談会の意見

(財) 畜産環境整備機構 参与 羽賀清典

1. 耕畜連携による堆肥の利用

養豚業は、生産した堆肥を還元するに十分な面積の農耕地を所有しない場合が多いことから、耕畜連携をより強化し、耕種農家のニーズに対応した品質の堆肥を生産し、利用促進を図る必要があると考える。耕畜連携の強化のための具体策として、1/2 補助付リースの活用やモデル地区の整備、エコファーマーとの連携などが上げられる。

2. 臭気問題への対応

依然として、臭気に対する根強い苦情が現場にあることは否めず、臭気対策技術や脱臭装置の導入のなどの努力を継続する必要がある。

しかし、ふん尿を適正処理している養豚農家においては、臭気の少ない実例が多くあり、ふん尿処理技術の更なる向上が悪臭の低減につながる人が多いと考える。

3. 水質規制の強化への対応

水質規制の強化が現実的となっており、規制強化に対応した污水处理技術の向上や、装置の導入・改善に努める必要があり、さらに污水处理技術に習熟した人材の育成が重要である。

生活環境項目については、污水处理施設の整備率は高いので、処理施設の充実・改善をさらに推し進める必要がある。また、污水处理システムはメーカーによってかなり異なるので、メーカーとの協力や連携を密にし、装置の充実・改善を図る必要がある。

有害物質項目の硝酸性窒素については、それが窒素肥料資源であることから、家畜ふん尿を堆肥・液肥等のかたちで有効利用を図り、汚染対策につなげることが第一と考える。

4. 動物医薬品の環境への影響

養豚で利用される動物医薬品の環境面での関心が高まっており、安全性に関する配慮が必要である。とくに、ふん尿中に残留した医薬品の堆肥化処理や污水处理過程における変化や耐性菌の発生、その堆肥施用による環境への影響などに対する関心が高い。また、医薬品が家畜体内で変化した代謝産物の安全性についても、関心が寄せられている。

5. 温室効果ガスの発生量、発生パターン、制御技術

地球環境への関心が高まっている背景から、ふん尿処理・利用過程で発生する二酸化炭素、メタン、亜酸化窒素などの温室効果ガスの発生量、発生パターン、制御技術を明らかにすることが重要である。